

## 鬼のプロデューサーは神様だった…

1974年春、ギターを抱えて運良くポプコン九州大会で賞を貰った! 嬉しかったけど、だんだん青ざめてしまいました。というのも受賞したのは初めて作った曲だから他の曲はナイ! 急いで完成度の高い曲を作る力量もナイ! だってそれまでにやってたことと言えば、洋楽の歌本のコードをポロンと鳴らしては「綺麗な響き〜」って遊んでいただけ。少しは勉強すれば良かった。何もできないのにいろんな出演依頼が舞い込むようになってしまいました。悩んでいる暇もないし、何と云っても「唄ってギャラが貰える! 凄い!」という訳で必死に3曲の駄曲を作りステージに立ちました。当時はどこでどんなコンサートをやっても満員御礼。テレビ、ラジオ、レコード、あるいはコンサートに足を運ばなければ音楽は聴けませんでした。コンサート会場はいつも「楽しみに来た! 精一杯やってくれ!」みたいな熱気に溢れ、出演者も観客も最高の時間を過ごしました。おそらく音楽的なテクニックは今のほうが優れていると思いますが、あの時代の音楽を通したみんなの魂の繋がりがみたい… 共有かな? 上手

く言葉にならないけど、そういうところは素晴らしかった。当時の私は16歳、女の子のギター弾き語りは他にいなかったし、賞を貰った曲はちょっと目立つ曲だったので出演依頼が来てたみたいです。その曲は「朝」朝野葉子(芸名)。内容は「朝の雨が優しく降り続く、冷めたベッドには美しい獣が横たわってる、そろそろ制服を着て学校に行かなければ…」って感じ。等身大のような微妙なテーマでした。実際には門限は夜の8時ちょうど、外泊などあり得ない家庭で育ちましたが。ある日、九州のラジオ局の「鬼の〇〇さん」と呼ばれていたプロデューサーから連絡が入り、ラジオ公開生放送の仕事をお願いしました。そしてめちゃくちゃに怒られました。何がってギターです、ギター! 1万円という超安値で買った私のギターは「ギブソンハミングバード」もどき! 直前にチューニングをしても本番では完全に狂っているのです。昔は音叉(おんざ)を使ってGの音を捕まえて他の弦を合わせていくという、耳が頼りのチューニング方法しかありませんでした。生放送はCMに合わせてタイトな時間割なの



Kei Hoshino

2005年12月14日、ジャズシンガーとして待望のリーダーアルバム「NEARNESS OF YOU/星乃けい」、2006年12月20日「IN A SENTIMENTAL MOOD/星乃けい」をリリース。ジャズファン、ジャズメン、オーディオファンから高く評価支持される

で、本番スタートしたら再チューニングは不可。音の合っていないギターで心折れながら唄う私。番組終了後に血圧250位の勢いでそのプロデューサーに怒られた! 怖かった〜。良いギターが欲しいと心底思いました。と同時にそれ以降は音程に神経質なくらい敏感になり、じっくり音を聴くようになりました。今でも自分の唄のピッチが甘かった時は「悔し〜」と心で泣いています。プロですから〜顔には出さないよん。音楽をやる人は自分の出す音に責任を持たなきゃいけない… 鬼さんが教えてくれたことは一生の宝物になりました。神様だったんだね。(つづく)